

近世・近代相国寺境内絵図について

三好 俊

京都市上京区にある臨濟宗相国寺派の本山、万年山相国寺（以後、相国寺）は京都五山の第二であり、永徳2年（1382）足利義満により建立され、足利歴代將軍の帰依を受け、五山の中心として威勢を誇った寺院である。中世史研究の上で注目を集める寺院であるが、相次ぐ戦乱により、絵図などの中世の境内の様子がわかる史料は残っていない¹⁾。

しかし、一方で近世の境内を描いた絵図は相国寺内に多数所蔵されており、これらの分析を通じて、当該期の実態に迫れるものと思われる。今回は、その中の絵図四点のトレース作業と分析を行った。なお、図1～3は伊藤真昭氏²⁾、図4は藤田和敏氏³⁾により先に紹介されている。

1. 天保14年（1843）相国寺境内図

図1は、「総封境之図」と題される。裏面には、「天保十四癸卯歳差出 当時総封境之図」と書かれている貼紙が付けられており、天保14年（1843）の相国寺境内の様子であることがわかる。今回紹介する4点の絵図の中では、一番成立が古いものである。絵図左下に書かれているように、「総地坪数平均凡七萬貳百五拾三坪餘」とあり、平米数に直すと22万平米以上の敷地を相国寺は持っていたことがわかる。

絵図上には、文化元年（1804）に畳置かれ⁴⁾、弘化2年（1845）に再建される⁵⁾富春軒や、天明8年（1788）の天明の大火により焼失し⁶⁾、嘉永元年（1848）に再建された⁷⁾桂芳軒、延享年中（1744～47）に畳置かれ⁸⁾、嘉永4年（1851）に再建が志願される⁹⁾大通院など、天保14年段階では建物がなかったと考えられる塔頭も記載されており、現存・跡地の区別なく描かれている。また、山門も天明の大火により焼失して¹⁰⁾以後再建がなされず¹¹⁾、描かれてはいるものの当該期には存在していない。以上から、図1は実際の様子よりも、跡地も含めて本来あるべき姿を描写することに重点が置かれていると考えられる。先述のように、近世において相国寺は天明の大火他により塔頭の焼失が相次ぎ、再建もままならないものが多かったことが、『参暇寮日記』からわかる。これは、隆盛期の室町時代ほどの幕府からの優遇が受けられなかったことによるものと思われるが、そのような中での境内の再建の嘆願にこの絵図が用いられたのではないだろうか。

一方で、この性質により、後述する後世に描かれた絵図や、現在の境内と比較することで、塔頭他の建物の移動を見ることができる。現在、法堂よりも南側にある玉龍院は、法堂の北東方向にあったことがわかる。また、現在境内の南側に位置する普広院は、絵図中心よりやや左（西側）に描かれている。その他、後に二本松薩摩藩邸の敷地となる「鹿苑院門前丁」も、絵図下部より確認できる。

2. （年未詳）相国寺境内図

図2は、題名・年代不詳である。伊藤氏により「天明大火後の境内図」と紹介された¹²⁾も

のである。写真上、赤線枠で、「～跡」とある箇所は、天明8年（1788）に発生した天明の大火の後、復興が成っていない塔頭や施設を表している。よって、地図上に表されている塔頭の状態をもとに、大まかな年代を割り出すことができる。

まず、天明の大火直後であるが、『参暇寮日記』天明8年2月3日条¹³⁾には、相国寺役者の光源院住持維明周奎より京都町奉行の山崎正祥へ提出された、大火で焼失した相国寺内の施設・塔頭名の一覧が写されている。それと対比すると、焼失したと届けられている、禅集庵・慈雲庵・長得院・豊光寺・桂芳軒・普広院・劫（却）外軒・玉龍庵・心華院・常在光寺・瑞春庵・善応院・鹿苑院が、本図の段階では現存している建物として描かれている。よって、大きく状況が異なるため、本図は天明の大火直後ではないと言えるだろう。

その後の状況と絵図中の境内の様子を照らし合わせる。大火から16年後の、同じく『参暇寮日記』文化2年（1805）10月14日条¹⁴⁾では、幕府の命により、相国寺境内で再建できていない施設・塔頭の一覧を京都町奉行に提出していることが確認できる。それによると、なおも長得院・豊光寺・桂芳軒・普広院・劫（却）外軒・心華院・常在光寺・善応院が焼失から再建されておらず¹⁵⁾、この段階においても図2の状況とは大きく異なっている。また、同日条にはそれらに加えて、図2上では現存していることになっている富春軒が文化元年（1804）に置置かれたこと¹⁶⁾、大通院が延享年中（1744～47）に置置かれたことも記されており、図2が文化2年よりも更に後の時代の成立であることをうかがわせる。

その後の塔頭の再建・廃絶の様子は、『参暇寮日記』はじめ『相国寺史稿』所収の史料により編年で確認できる。しかし、史料の制約もあり、図2の状況に合致する時期を特定することは出来ない。そこで、次に先述の図1「総封境之図」との対比を試みる。

この両図を比べた際に異なる点として、図1「総封境之図」の下段（南側）中央にある「晴雲院」が、図2では「養源院」となっている。なお、当該の箇所は現在では養源院が建っている。それにより、図2は図1成立の天保14年（1843）より後の成立となる可能性が高くなってくる。この、晴雲院と養源院の寺地の移動であるが、『参暇寮日記』嘉永元年（1848）2月3日条¹⁷⁾によって、その旨が衆議によって決定されたことが伝わる。よって、図2の成立は嘉永元年以後となり、天明の大火から実に60年もの歳月を経た後ということになる。

3.（年未詳）薩摩藩屋敷地図

図3は、時代を表す記載はなされていないが、幕末に当時の騒乱で重要な動きをなす薩摩藩の屋敷に相国寺に貸与した敷地の図である¹⁸⁾。絵図内の赤線で囲まれた範囲（トレース図では、一点破線で表す）が、文久2年（1862）9月より薩摩藩に貸し出された¹⁹⁾範囲となる。

鹿苑院西側の敷地、瑞春庵（現在の瑞春院）南の敷地、そしてこれに隣接する門前町を含んだ地所を借り受けることを表している。絵図上の南、「鹿苑院門前東町」「鹿苑院門前西町」「九軒町」「大門町」といった町も立ち退き、薩摩屋敷となっていく。この地に立てられた二本松薩摩藩邸は、薩長同盟の会談場所のひとつとされている（締結は堀川・一条戻り橋近くの小松帯刀邸内）。維新後、敷地は元会津藩士山本覚馬の手に渡り同志社英学校に譲られた。現在は、同志社大学今出川キャンパスとなっている。

4. 明治5年（1872）相国寺境内図

図4は、「明治五壬申年九月十二日府庁工差出現境區別図」と題される。今回紹介する絵図の中では最も新しい明治5年（1872）成立のものである。絵図の中心部が破損して読み取れないものの、当時の境内の様子が細かくわかる。所々、坪数の付箋が貼り付けられており、トレース図では「 」で表した。

特徴としては、全体に色分けされており、「上地」「道」「水」の区分がある。塔頭名が四角い枠で囲まれているものは「現在地」であり、当時残っていた建物を指すものと考えられる。「上地」とは、上級権力によって没収された土地の意味であり、絵図からわかるように、境内の多くの部分を相国寺が手放していたことがわかる。絵図上に記されているように相国寺が持っている「総地坪道共」は「貳萬七千五百五十四坪七分六里」であり、先の図1の天保14年（1843）の相国寺境内図における「総地坪数平均凡七萬貳百五拾三坪餘」と比較すると、3分の1にまで縮小している。先の図3に描かれた薩摩藩に貸与した、鹿苑院周辺の敷地も黒く塗られており、相国寺に返還されていなかったということである。明治維新後の相国寺を取り巻く厳しい状況が想像できる。

【註】

- 1) 中世の相国寺境内に関する研究としては、高橋康夫「室町期京都の都市空間」（中世都市研究会編『政権都市—中世都市研究九』新人物往来社、2004年）が挙げられる。
- 2) 伊藤真昭『近世の相国寺』（相国寺教化活動委員会、2008年）。
- 3) 藤田和敏『宗門と宗教法人を考える』（相国寺教化活動委員会、2014年）。
- 4) 『参暇寮日記』文化2年10月14日条（『相国寺史料』第7巻、思文閣出版、1990年、560頁）。
- 5) 『参暇寮日記』弘化2年12月6日条（『相国寺史料』第9巻、324頁）。
- 6) 『参暇寮日記』天明8年2月3日条（『相国寺史料』第6巻、410頁）。
- 7) 『参暇寮日記』嘉永元年2月3日条（『相国寺史料』第9巻、404頁）。
- 8) 註4参照。
- 9) 『参暇寮日記』嘉永4年11月7日条（『相国寺史料』第9巻、470頁）。
- 10) 註6参照。
- 11) 相国寺は天明8年から文化14年までの29年間に、幕府に対し直接六回、間接に三回も嘆願請願を試みるが、遂に成功せず今日に至り、山門はただ礎石を残すのみである。
- 12) 註2参照。
- 13) 『相国寺史料』第6巻、410頁。
- 14) 『相国寺史料』第7巻、560頁。
- 15) なお、鹿苑院は『参暇寮日記』寛政2年（1790）9月15日条（『相国寺史料』第7巻、68頁）、禅集庵は『参暇寮日記』寛政7年12月26日条（同、221頁）によって、文化2年以前に再建されていることが確認できる。
- 16) 『参暇寮日記』文化元年正月27日条（『相国寺史料』第7巻、496頁）にも、同じ内容の記事有り。
- 17) 『相国寺史料』第9巻、404頁。
- 18) 絵図に関連する、相国寺を取り巻く幕末動乱の様子や、薩摩藩との関係については、笹部昌利『幕末動乱の京都と相国寺』（相国寺教化活動委員会、2010年）を参照。
- 19) 文久2年9月付借用地証状（「相国寺文書」）。